
魔法少女リリカルなのは X.story—銀の覇王—

麗 × 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは X・story―銀の霸王―

【Nコード】

N7196R

【作者名】

麗×零

【あらすじ】

俺は八神 ファイ・S・ハラウン。St・ヒルデ学院の中等科一年生。父さんがいなくなってから、何年もたってる。俺の生まれは変わってて、父さんと呼べる人は本当はいないんだけど……。俺なりに、父さんの背中を追ってる。いつか、追いつくために――

――。魔法少女リリカルなのはの二次創作です！まだ、文章がグダグダになる部分がありますが、なんとか頑張っていけますので、よろしく願います！

追記。諸事情により、あらすじと、章の名前を変更させていただきました。ご迷惑をおか

け
し
ま
し
た。
。

プロローグ（前書き）

あらすじにもありますが、この物語は、ZEROSTORY - 絆（KIZUNA） - の続編です。

できるだけ、矛盾がないようににはしていきたいと思いますが、質問などがある場合は容赦なくしてください。

その方が自分もためになります。

最初は短いです、どうぞ。

プロローグ

― 幸せでいいんだ…… それでいい…… ―

それは、父さんが俺等二人にかけてくれた言葉……。

― 行ってくる。蓮華。ファイ―

そう言つて頭を撫でてくれた父さん……。

けど、今は慟哭に…… 悲しみに……。

そう、今はもういない、一番大切なものに。

俺の手は…… 届かない。

まさか、あんな出会い方で――。

あんな、別れ方だなんて――。

― 魔法少女リリカルなのは X・s t o r y

・ 銀の霸王 ―

―― ファイ Side

「……ここ最近毎日だ……」

起き上がって自分の部屋を見る。殺風景な部屋の中。

とは言つても、なにもない訳じゃない。机の上には書類と辞書、その他諸々な物の束。

それで、足元には、ストレージデバイスが置かれている。

昨日も、今日の1時まで勉強してたんだっけ。

……父さんが死んだ年から3年以上が経った。俺は中等科1年生で俺の妹である蓮華は初等科の4年生になってる。

本当は、高校まで行けたらしいんだけど、俺はそれを拒否した。蓮華は初等科の後半戦から行けるといふ事らしい。

俺が拒否した理由は、二つほどある。

一つは、そこまで行く気はないという事。

もう一つは、自分としては義理がくつきりについて良いという事。その二つ。と、着替えをしつつ説明をしている訳なんけども、時間を確認すると、まだ3時。2時間しか寝てないのか……。

まあ、朝ごはん作ってから、自主練して風呂入ればいいか。

そんな風に思つて、壁に立てかけてあつた木刀を手に持ち、一階に降りる。

誰か起きてるなんて浅はかな期待をしつつ電気をつけると、はやて母さんが仕事帰りなのか、ソファで眠っていた。流石に起こしたら悪いか、電気を消して中に入る。

「全く。こんなんじゃ風邪ひいちゃうって」

俺は独り言と共に自分の上着を脱いで、はやて母さんにかけてあげる。

ちなみに、なんで俺がはやて母さんって呼ぶかというと、俺ははやて母さんとは血の繋がってないけど、息子だから。

同じ理由でフェイト母さんっていう風にも呼ぶ。まあ、二人は少し過保護なところもあるから少し困っているような、ない様な。

まあ、そんな様で。とりあえず、Yシャツ姿のまま朝食を作り始める。まあ、この家の朝食の量は尋常じゃなく多い。

シグナム姉さんたちも一緒に食べるから。そういえば、今日が丁度始業式だっけ。Yシャツ、着いたところには汗だくになってそうで、

少しだけ怖い。

今日の朝はワカメと豆腐の味噌汁と、後は角煮とサラダ……材料はまあたっぷりあるし、大丈夫だろう。

「さて、朝ごはんの下ごしらえは終わったから、ちよいと読書でもしようかな……」

伸びをしながら、時計を確認すると、鍛練なんてやってる暇がなかった。

毎回やってるような気がしないでもないよな、これ。

木刀持ってきて、蓮華とヴィータ姉さん、そして、アリシア姉さんの好き嫌いも考えて。

それをしつつ、はやて母さん達の仕事に支障がないように作ってた、時間がないって。

なぜ同じ失敗を何度も繰り返すんだろっとな、俺って。今日も悪運が付いてる気がする。

自然にため息が口の中から漏れる。

そんな事はともかく、本を取りに行こう。首を横に二、三回振ってから二階に向かおうとすると、はやて母さんが起き上がっていた。

「おはよ、ファイ」

「おはよう、はやて母さん」

につこりと笑うはやて母さんにそう返すと、はやて母さんの隣に俺は腰を下ろした。

暗いから見えずらいが、目の下には少しだけ隈ができている。

光で起きなくても、音と匂いで起きちゃうか。不覚だったなあ。

「はやて母さん」

「なんや？」

「昨日も遅かったらまだ寝てた方がいんじゃない？」

「大丈夫。ほら、立てるし」

「ホントかな？」

不安だ。しかも両腕で力こぶを作るような動作をしてるところがさらに怪しい。

俺が身長高い方でよかったと思った。頭一つくらい違う身長なら軽々と支えられるから。

こんな状態で本当に料理とかさせたら危なさそうだし。

「大丈夫やよ？ ほら、ね？」

そう言つて台所を眺める。

包丁を持つとうと思つたのか、手を伸ばした瞬間に……落とした！？
流石に足は怪我されると拙い。だから、刺さつた瞬間に包丁を浮かせよう。

そう言う感じで、右手に包丁が刺さつた。魔力を注いで、浮かせる。痛いな……。空いてるほうの手で包丁を手にとって、シンクの中に入れる。

「ファイ……」

「大丈夫だつて。最近俺一人で朝飯作る時が多いから、はやて母さんが取りにくくなつただけだから」

「ごめん……気をつける……」

少ししまったという風な表情で話すはやて母さん。

俺は首を横に振つてこたえる。

「気をつけるのは俺の方だよ。あんな不安定な場所に包丁置いておいたの俺だし」

そう言つて、棚から包帯を取り出して手に巻きつける。
この傷なら、すぐに治せると思うけど、でもきつめに締めておいた方がいいかも。

そう思っていると、はやて母さんに包帯を先に取られた。

「一人じゃ縛れないでしょ？」

「……そうだね。お願いします」

俺はソファーに座つて、はやて母さんもその隣に座る。その手には、消毒剤と包帯が。

挟るように傷の付いた右手を差し出すと、手際良く消毒剤と包帯を使つて手当とする。

やっぱり、いざという時に、自分の親つて言うのは、頼りになる。

「ごめんな？ ファイ」

「大丈夫だよ。眠そうだったからやつてただけだし。それに、料理は合宿の時に教えてもらいました」

と、ちよつと得意げに言うと、「それもそうやな」と、笑う。
けど、まだ少し引きずっている様だった。命があるだけありがたいのに。

というとかなり大げさ。そう思うけど、母さん達はどうしても背負う気があるみたい。

「なんで母さん達はそう引き摺るかなあ」

「え？」

「子供じゃないんだ……つて言うとは違うな、もっと、頼つてほしいかな。確かに、父さんがいなくて大変なのはわかるけど、それを無理して働けつて俺は言つた覚えはない」

「けど……」

「家族はチームなんだし、少し寝てた方がいいよ。職場勤務で隈できてたら、恥ずかしいよ?」

「……それもそうやな。ご——」

「謝ってばかりも駄目。とにかく、寝て」

「う、うん……」

と、まあ、半ばゴリ押しではやて母さんを寝かせるともつ時間は五時。ヤバいじゃん……。もうすぐで皆起きる……。

額に冷や汗が通るのを直で確認すると、速攻で朝食を作り始める。焦るほどでもなかった。うん。てか、ものの数分で出来上がったしまった。

「まあ、いいか」

「早いな、ファイ」

そう声をかけてきたのは、一番大人びた雰囲気を感じる桃色髪のポニーテールをした女性。

シグナム姉さんだ。

「おはよう。シグナム姉さん」

「姉、と呼ばれるのはいつになってもなれないな」

「まあ、そのうち慣れるよ」

そう言った後に、今日の朝ごはんの献立を確認するかのように後ろから覗き込む。

「和食か?」

「うん。朝だから、栄養分は高めにしてね」

「いつも、すまないな。いくら疲れてるとはいえ、精神的に疲れて

いるのは、主等の家族なのに」

「大丈夫だよ。そのためにも、俺等が支えてあげないと、だし」

俺がそう言っていると、頭の上に手を置かれた。

少しだけ視線を上にあげると、シグナム姉さんが少しだけ嬉しそうな表情をしていた。

「嬉しそうだね」

ちょっと聞いてみたくて、そんな風に口に出した。

そうしたら、「成長が嬉しいのかもな」と言って、テーブルの方に歩き去っていった。

2年くらいじゃ母さん達には敵わないちょっとした時間だからなのか、偶にシグナム姉さんの考えてることは不思議だ。

「おはよ」

「おはようございます」

「おはよう」

また3人の声が聞こえた。鏡にはシャル姉さん、フェイト母さん、ヴィータ姉の姿が見える。

多分、足元にはザフィーラがいると思うから、あえてカウントなし。やっぱり、この家の低血圧は、どうやったってあの二人なんだよね。妹とフェイトの姉さんの二人。

「フェイト母さん、ちょっと二人起こしてくる」

「あ、私が起こしに……」

「いや、母さんもいろいろと大変だろうし、それに、あの二人はちよつとやさつとのことじゃ起きないしね」

「もつと頑張るよ!」

「空回りしないでね。それと、アリシア姉さんは殴っても起きないのは実証済みだから、いろんなところくすぐって起こして。後、蓮華は、昨日遅くまで起きてたみたいだから、スターライトブレイカーが飛んでくるよって言って起こして」

「う、うん……」

そう言つて、母さんは二階の方の上って行つた。

その時、ヴィータ姉が俺の方に少し怒り気味で歩いてきた。

多分、そんなことならお前が起こしに行け、と思いつきり説教だろう。

「説教なら聞かないよ。ヴィータ姉。多分、聞こえてくるから」

「聞こえてくるって……」

「あはははは！ フェイト、ちょっとやめて！ そ、そこは……！」

「あはははは！」

「ね？」

「ね？ って、お前なあ……」

ヴィータ姉は、心底呆れてるのか、感心してるのかがよくわからないジト目という表情になっている。

次いで、蓮華の「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」という延々と長い念仏の様な言葉が聞こえてきた。

呆れて、ため息が出ない。

『いただきます』

食卓に並んだ量の多さによく頑張った、俺。と褒めてやりたくなる。味は申し分なし。あの短時間でよくどこまで頑張ったものだ。箸を取ろうとした時に、一本滑って落ちかける。開いていた左手で無理矢理押さえて、難を逃れる。誰も見ていなかったようなのでよかった……。

「少し血の味がするな……」

……少し入ったか……。手を切ったとは言わずらいし……。実際には、決るように刺した、だけど。

自分のせいじゃないにしろ、それを堂々と開かせる勇氣なんてない。

「血抜き、完全にできてなかったんだよね。ちょっと時間なくて」

「ファイがあゝ？ 珍しいね」

「アリシア姉。今、はっきり言うと、アリシア姉が好き嫌い多いのがいけないんだよ？」

「な、なにおう！」

「言われてるわね。アリシア姉」

俺の言葉に便乗するかのように、蓮華は突っ込むようにやいやい言ってる。

けれど、何度目のこの際だかわからないけど、釘をさしておく。

「自分がそんなことないって言う風に言ってるけど、蓮華もそうだからな。少しは克服してくれないと」

「ぐっ……！」

「やゝい、言われてやんの」

「てか、食事中にそんなことで喧嘩するなよ」

俺は食べ終わって食器を片づけにシンクの方まで行く。

一応、その片付けの中には、血まみれの包丁もあるわけなのだが、俺は包丁をさっさと片付けて、自分の食器を洗い始めようとした時、ふと思った。

手に包帯を巻いている。そんな状態でどう食器を洗えばいいのだ！？ 滲みてしまつて意味がないだろう……。少し、動きが止まつてしまつた。

それを見計らつてか、シグナム姉さんがこっちを見た。

「私が洗つておこつ。今日は始業式らしいしな」

そう言つた。シグナム姉さんが。

多分、俺の手の怪我の症状にも多分気付いてるんだろう。ご飯食べようとした時に、橋を落としそうになつたのを見たんだろ。うし、シグナム姉さんが血が入つてる発言をした時の俺の表情の動き。

俺は朝にシャドーボクシングをしているから、皆気付かなかつたんだろ。うけど。シグナム姉さんは剣をやつてるから、相手の動きを読めるんだろ。

一番姉さん達の中で尊敬できる。俺より強くて、気が利くから。

「ありがとうございます」

「タメ口で良いのだぞ？」

「なんとなくだよ」

そう言つと、二階に行つて鞆を取りに行く。

俺の部屋は父さんの部屋の隣にあつて、意外と近い。

そこから、皮で出来たような鞆を開き、中身を確認する。

父さんから預かつた霸王の断章は持つたし、それにグローブだつて持つてる。

それを確認して、安心した後。写真の方を見る。

俺たち家族の写真。父さんが真ん中で、その前に俺らが座ってる。

「いってきます。父さん」

そう言つて、部屋を飛び出る。

そろそろ時間だし、行こうか。

「行ってきます！」

『行つてらっしゃい』

今日は始業式。

俺は一步踏み出す。

ファイ「という訳で、後書きです。この作品は、割と落ち着いた感じで行きます。パーソナリティは、この作品の主人公二人で、俺、ファイと」

蓮華「私、蓮華で！」

『お送りします』

ファイ「まあ、エフェクトは無しだね。EAを矛盾点多過ぎという理由で潰した作者さんは、この作品描き切つてほしいです」

蓮華「そうね。とりあえず、年末企画は没になったし。後はこの作品のテーマですね」

ファイ「いつも、仲間はそばにいる。そんなテーマでやっていこう

と思います」

蓮華「そうね。さて、次回予告はないとして……。とりあえず、今回は、なんか変な回だったわね」

ファイ「次回からはVIVIDでおなじみのあの人が登場します！」

蓮華「ちなみに、ファイの恩師よ」

ファイ「言わないでよ……」

蓮華「それでは、また次回♪」

プロローグ（後書き）

キーワードでこんなのを入れた方がいい、とかあったらよろしくお
願いします。

では、また次回に。

第一話―魔法学院とファイの一日―（前書き）

若干更新ペースが速いですが、ストックためられないですね、これじゃあ。

というわけで、期待(?)の第一話、いきます！

第一話―魔法学院とファイの一日―

ファイSide

俺が通っている学校というのは、サントSet・ヒルデ魔法学院と言って、その名の通り、魔法に関することが主に授業を通して学ぶこと。

俺はそんな基礎を合宿の内にも学んでおいた。それ以外には、父さんが消えてから死ぬ気で独学だけれど、全部勉強した。授業なんて、本来出るべきではないんだろうけど、とりあえず出てる。

「おはようございます」

と、後ろから声をかけられた。

後ろの方を振り向くと、アインハルト・ストラトス――俺はハルトさんと呼んでいる――が俺の事を見て立っていた。

俺は体をハルトさんの方に向けて「おはよう、ハルトさん」と返す。少し小走りに俺の方まで来たから、教室まで一緒に行くこととしよう。

「今日は、早いですね」

「包丁でグツサリやつちゃって。それで、あんまり家の中に居たくなかったから出てきたんです」

「グツサリ……？」

「そう、グツサリ」

俺は、ハルトさんに『包丁をグツサリ貫通させたから巻いた包帯』が付いている右手をひらひらと見せる。

それを見た瞬間、血相を変えたように俺の手を取ってきた。丁度、傷の部分に指が食い込み、痛みが俺を襲う。

「っ…………！」

「あ…………」

ハルトさんはあわてて手を離す。

相当顔が歪んでいたんだろう。包帯には少しだけ血が滲んでいた。

「謝る必要なんて、ないですからね」

「そうですか」

二人、肩を並べて教室に來ると、授業道具の確認をする。

なくても、あっても別に大丈夫な訳だけでも。とりあえず、確認だけはしておこう。

評価下げられて留年も嫌だし。忘れてた物は無し、と。

「ファイさん」

ハルトさんが声をかけてきた。なんか、申し訳なさそうな雰囲気だ。

「謝る必要ないって言いました」

「ですが…………」

「怪我することなんてしょっちゅうだし。気にしないでください」

俺はそう言うと、教室の窓を一枚開き、その縁に座る。

ハルトさんは俺の近くまで來ると、傷ついた方の手を傷に触れないように優しく包む。

「…………どうしたんです?」

「少しだけ、握らせてください」

「……。まあ、いいです。どうぞ、ハルトさん」

——いつも通りで少しだけ安心だな……。

知り合った時から、ハルトさんはこんな感じだった。姉のような存在で、ちよつと……いや、かなり頼りになった。

今もこうして俺の怪我を心配してくれる。悪い気はしない。

ただ、申し訳ないと思うだけなのだが。……悪い気はしてるな、俺。ただ表現変えたただけだし。

「フアイ〜」

「ん？」

俺は声の主の方へ振り返る。その声の主は、蓮華だった。手には、俺の胸にいつもかけてあるペンダントがあつた。

……気付いてなかったのか、俺。もっとしっかりしないとイケないな、おい……。俺は蓮華の方に歩み寄って、ペンダントを受け取る。

「ありがとな」

「いくら手に包丁が刺さつたとはいえ、ちゃんとしなさいよ」

う……。それを言われるとこちらとしては、かなり心に来るものがあるのだが。

それを表情から感じ取った蓮華は嘆息一つし、呆れ顔で腰に右手を当て、カバンを背中に担ぐような形になる。

「手をつなぐなら、もっと人氣が少ないところにした方がいいわよ、アンタ唯でさえ、母さん達の息子って事で有名人なんだから。あらぬ噂を立てられても困るわよ？」

手をつなぐ……？ 俺がそう思って、後ろを見てみると、ハルトさんが手を握ったままもじもじしていた。赤面状態。
……って、つなぎっぱなしだった。

「ごめん、ハルトさんっ！」

俺はあわてて手を離し、ハルトさんに頭を下げる。

「あ、いえ、握っていたのはこちらですし……」

ハルトさんは少し戸惑うような表情。しかも、少し残念そうな感じに……。なぜ？

俺は改めて、自分の状況を把握する。もしかして、手フエチ？
……ありえないだろ。

「いつまで夫婦漫才やってるつもりよ、全く」

「誰が夫婦漫才野郎だ……」

「それはそれでありかもしれませんが……別にファイさんとなら……」

ハルトが何か言っているが良く聞こえない。ぬう……。老化か、それとも、俺の注意力が足りないか。いかな……。そろそろ本気で寝ることも考えておかなければいかんって事だぞこれは……。

なぜか蓮華はきょとんとした表情でハルトさんを見てるし。その数秒後、「ファイさんとならって……プッ……」と吹きだし始め、勝手に笑い始めた。

俺らの発言聞いて笑っているなら、失礼極まりない。一度教育者の目を見てみたい……。……やっぱ前言撤回。はやて母さんならやりそうだ。

「なにがおかしいんだよ？」

「いや、ごめんね、ごめん。まさか、ハルトさんがね……。く……。ハハハ！」

「なっ!?!」

ハルトさんはハルトさんで反応してるし、蓮華は蓮華で笑いすぎて目尻から涙が出始めてるぞ。どう收拾つけたもんかな……………。

「いい加減笑うのやめたらどうか？ 蓮華ちゃん」

「あゝ。そうだね。ヴィヴィオ。でも、まさかね……………ははっ……………」
「だから、笑いすぎだつての。さつさとお前は教室に戻れ」

俺は、邪魔者を追い出すように手を振ると、蓮華とヴィヴィオは中等科の方を抜けていき、初等科の方へと歩いて行った。

「まあ、コイツを届けてくれたのはありがたいけど……………」

俺が今手に持っているのは、金色の十字架型のペンダント。中心には、青の宝石が輝いている。ちなみに、これは普通にアクセサリーに見えなくもないが、デバイス。

今自分専用のデバイスがないため、粗大ゴミの日にちよくちよく使える部品取り出しながら作ったジャンクデバイスなのである。

いつも持っているのは護身用の一つデバイスがあった方がいいという事と……………。一応、母さん達には内緒で作ったから、ばれたら没収される可能性もなきにはないからという事かな。

「……………聞いてます？」

「ん。あ、ごめん。もう一度最初から」

「……………もういいです」

なぜか拗ねて、自分の席の方に行ってしまう。

（言ってくればよかったのにな。そんなに恥ずかしいことだったのか？）

俺はそう考えたが、まあハルトさんなりの理由があるんだろうと割り切って、自分の席に足を運ぶ。教室がハルトさんと一緒なのは確認したが、その他は全然確認してないので少し心配になってくるな……。

蓮華、クラス分けどうなってるかな……？ ヴィヴィオ達と一緒にだといんだけど。



蓮華 Side

「蓮華ちゃん、さっきのは笑いすぎじゃ……。ハルトさんも固まってる……」

「いいのいいの。いや。明日には噂になるかもね……」

ひとしきり笑って、まだちょっと涙がたまっていた。

私はばらす気はなかったけど、ちょっと面白いかも。と思ってしまった。

「止めておいた方がいいと思うよ？ ファイ君って怒ると怖いし……」

「ばらす気なんてないって。私、ファイの困った顔見ただけだし……」

「けどさ、一応上級学年な訳で……」

「ヴィヴィオは弱気だな。そんなだと、幸せもどつか逃げちゃうよ?」

そう言つて私が笑うと、ヴィヴィオも若干ひきつった苦笑いを見せる。

というか、ファイは固すぎるのよね。訓練とかかなり真面目に休憩取らずにやってるし、それに今日の朝だつてはやて母さんのミスだつて教えてくれたのはシグナムさんだ。それを庇ってるファイってどうなんだろ……。

……つて、何を私は考えているっ!? あんなの、少し茶化すくらいでちょうどいいつて事をただ言いたかっただけなのよ! うん! その通り! 私は若干ファイの事を考えて赤くなった方をごまかすように左右に振り回す。

「どうかしたの?」

「なんでもない! 何でもないのよ!」

私が慌ててそう言い切るとヴィヴィオの頭の上に「クエスチョンマーク(?)」が浮かんた気がした。

拙い、これは拙い様な……。

「ごきげんよう。ヴィヴィオ、蓮華」

Good timing! と叫ばずにいられないタイミングに来たのは、コロナとリオだった。

というか、クラス分けどうなつてたっけ? まだしっかり見てなかったけど……。

いいや。ちよつと魔法使ってみちゃえ。という事で、ファイに教わった偵察魔法を使つて確認する。

「三人一緒の同じクラスだね！」
『イエーイ♪』

今、三人って……。もしかして、私……。そう思って、隣のクラスに目をやると、そこに私の名前が刻まれていた。

「どうしたの、蓮華ちゃん？」

「は……」

「は？」

「はぶられたあああああああああああああ！？」

『ごめんなさい』

と、凄く後悔を強いられる結果となってしまった……。

謝っていたヴィヴィオ達にもいきなりびつくりさせた事をしっかりと謝罪した。

屋上Side

「んで。なんでその話を今俺がお昼に学食食ってた時にするわけだ？」

「だって、ファイしか頼れる人いないんだもん」

現在の時刻は、お昼すぎに当たるであろうか。

そのくらいの時間に蓮華がファイのもとを訪ねてきたのであった。正直言って、転校生と同じ気分であろう。飛び級で特別に入れて貰ったクラスは。

「てか、俺でも限界ってあるんだからさ。あきらめてくれ」

「妹を見捨てるの!？」

「誰も見捨てるとは言ってない。ともかく、初等科の校長先生と相談してみるから、それまで少し待っていてくれ……。まさか、お前がな」

ファイは空を上目で見ながら、牛乳を飲む。その姿を横目で見ながら、方を膨らましてムスツと膨れている。

正直言って、ファイがハブられなかっただけで、当然の結果であるのかもしれない。だが、妙な引っ掛かりを感じていた。それだけは事実だった。

まるで、自分から罠にかかりに行っているような……。そんな引っ掛かりがあった。

「んなことあり得ないよな……。深読みしすぎか」

「ん？」

「いや、なんでもないさ。そろそろチャイム鳴るし、戻ろうぜ」

ファイはそう言っ立ち上がるとゴミをまとめて、初等科の屋上を降りる。

ファイが初等科にいるのも、蓮華が来いと言ったからだ。それで来てみたら「クラスが違う!」って大激怒とため息な訳で。

俺は蓮華の便利屋なんじゃないって……。と、ファイは言わずにはいられなかった。ため息ばかり出て、他の初等科の生徒から目を向けられてしまう。

「あの……。ファイさん？」

ファイがその声に振り向くと、ヴィヴィオがオドオドとした感じで立っていた。

ファイは自分がため息ばかりついてるからだ……。自重しな

いと。と思い、なるべく作り笑顔を作って振り向いた。

「どうした？」

「えっと……。大丈夫ですか？ ファイさん。また蓮華ちゃん……」

「大丈夫さ。それに、アイツはクラスに知ってる奴いないみたいだし。まあ、俺は中等科だから会えるタイミング少ないしさ、構ってやってくれないか？」

「あ、はい……」

「ありがとな」

ファイはヴィヴィオの頭の上に手を置いた。その後、二回撫でてから、窓から中等科棟の方に跳躍していった。

屋上に着地したファイを見てヴィヴィオは軽く呆けていた。あそこまで飛ぶには、純粋な力以外にも、魔力運用が大切なことは明らか。

それを軽々とこなしてしまうファイは相当訓練などを頑張っているのだろぅと思われる。そして、ヴィヴィオ以外にも周りにいた生徒たちも啞然としていた。

何気の無い様子で笑顔で手を振るファイを見て、ヴィヴィオは少し安心した。



ファイSide

「さて、と」

俺は、今日の授業が終わったところで、自分のカバンに全部の物をつっ込む。

正直言って、今日は色々あった。自己紹介で思いつきり噛んだ奴もいたし。

舌予想より強く噛んでたみたいで、悶えてただけだな。しかも、女子。小動物系の。

まあ、可愛いには可愛いんだが、なんか……。

「危なっかしい感じだな……」

なんか、ベクトルのにヴィヴィオに似てるんだが、それでも、まだヴィヴィオの方がマシだと思える。

いや、本当は言っではいけないのだと思うのだが……。いや、マジで。さすがに、技術が進歩してるのに風呂敷はないと思うなあ……。

「今誰かな！？ 風呂敷は絶対に学校ではないと思った人は！」

「俺」

「ファイ君かあ！」

そのまま、こちらのほうに走ってくる。途中で、段差に突っかってこけた。大丈夫か、おい。ちなみに、そいつ名前はラン・サイジョウ。

って言ってる間に起き上がってたわけだが……。うわ、涙目だよ……。俺のせいかな？ 皆から受ける視線がすごく痛いのだが。

「だ、大丈夫か？」

「心配してくれるなんて、ファイ君は優しいんだね……」

「いや、涙目でそんな風に見られたら誰だって心配するって」

そう言われた途端に、はっ、となって、いきなり目尻についている涙を拭きとった。

その後、素早く立ち上がり腰に手を当てて俺に話しかけてくる。
正直言つて、背が小さいので、子供が大人ぶっている素振りかわ
いだけだというのは言うまでもない。

「ファイ君！」

「なんでしょうか？」

「風呂敷はね、実は君が思っている以上に使える道具なんだよ！
しかも、私が持っているのは、現代における最新素材、A-108
だからね！ どんなに強靱な刃物だろうと、この風呂敷は破れ――
――」

シャキン――。

俺は制服の中から、バトルナイフを取り出した。そんなに頑丈な
ものなら、是非とも家にお邪魔して買っていきたいものだ。そう思
い、ナイフを取り出したのだが、腰を抜かしてしまっていた。しか
も、泣く寸前まで震えてた。……つて、ちよつ！？

「殺される……！？」

「殺す気ないからっ！！」

面倒な誤解を招かれると面倒なのでツツコミよろしく、思いつき
り叫んだ。

だが――。

「嘘だっ！！」

「えええっ！？」

思いつきり嘘って言われた……。

なんだこの子！？ 意外と扱いが簡単に見えて難しい感じなのか！？
というより、さっきより冷たい視線が鋭くなつたのだが！！ 汗が

背中を伝っていくことが簡単にわかる。あゝ……。なんだ。その、俺がそんなに悪い人間か。皆。

「耐久性に優れるんじゃないかなかったのか？ その風呂敷」

「ああ。そうだよ。けど、刃物は……」

「所詮その程度か……。期待してたんだけどな」

俺はそう言って、ナイフをしまうと、溜息を吐く。

（遅いわよ、ファイ）

その念話の声の主は蓮華だった。俺は、窓際まで行って外を見てみると、蓮華たちが中等科の校門の前で待っていた。いや、実際。不機嫌そうに頬を膨らませて寄り掛かっているのは蓮華で、ヴィヴィ才達はこっちに向かって手を振ってる。ハルトさんもいるから、今日はみんなで帰る感じ……。か。

俺はそれをしっかり確認すると荷物を持って、外へ向かう。

（速くしなさいよ、私達結構待ってるんだから）

（あいよ。わかってます）

俺は蓮華に言われて、駆け足になった。途中何人かの人とぶつかりそうになっただけ、軽く身を捻りながら外に向かっていった。

「遅い」

「すまん。もう帰ってるかと思ったんだ」

蓮華に言われて、大人しく頭を下げる。

実際。本当にそう言う風に思っていた。ハルトさんが外に向かって歩いて行ったのは目視で確認してるけれど、そのまま真っすぐ家に向かって帰っていたのかと思っていた。

まあ、待っていてくれたのはありがたいんだけどな。最近物騒だし。父さんがいなくなってから、急に犯罪が増えた気がするって言うのは多分気のせいだと思うんだが、大体その時期から多くなってきた。だから、どちらとも言えない。

「ファイさんを置いて帰ったりなんかしませんよ。蓮華ちゃんの事で色々聞きたいこともありますし」

ヴィヴィオがそう言う風に苦笑いで手を振っている。てか、小さいときからよく遊んでたし、別に敬語とかはいらないと思うんだけどな……。

そう思っ、頭をあげて鞆を肩に担ぎ6人で固まって歩く。俺は、歩き始めてすぐに言った。

「あ。リオ、コロナ、ヴィヴィオ。俺に対しては敬語はいいからな？」

「いや、ですけど……」

「別にそっちの方が話しやすい、とかならいいんだがな、その……敬語ってなんかこう……。恥ずかしくなるって言うか、むず痒くなるんだよね」

「その気持ち、わかる！　なんか、むずむずするんだよね」

「リオ、今みたいな感じで返してくれると俺的にもありがたい」

あんまりにも喰い付きが良かったので、思わず指を指してしまった。

いきなりの行動で少し驚いていたようだが、俺は気にせずに元の歩き方に戻る。

今日は訓練できてないし。最近、事件事件の連続で母さんたちが忙しいのはわかってるんだけど、それでも少し力不足な気がする。

「また、なんか難しいこと考えてる」

蓮華は最近機微が鋭くなってきてるし、あんまり考えるのはよそう。

なるべく明るくふるまっておこう。

「なんでもないさ。ハルトさん、今日空いてます？」

「一応は……」

「なら、組手しませんか？ 今日朝バタバタしてたんで、訓練できてなかったんですよ」

「まあ、そう言うことなら」

渋々ながら了解してくれた。ハルトさん、都合悪いんだったら俺やめるのに。俯いて、少し気分が沈んでいるハルトさんを目にした俺はかなり申し訳ない気持ちになった。

さすがに、無理矢理もよくないな。それに、おこがましいか。そう思い、行動に移した。

「無理矢理すぎましたよね、流石に。また今度でいいですよ？ 僕」

「いえ、そう言うわけではないんですけど、その……」

「無理に付き合ってくれなくてもいいですよ。気が変わったら連絡してください。蓮華、俺寄り道して帰るからよろしく」

俺は今度は蓮華に顔を向けてそう言う。ヴィヴィオ達と話していた蓮華は一呼吸おいて足を止めて言う。

「わかった。あんまり遅いと母さんたち心配するから、早く帰って

来なさいよ」

「今日は母さんたち仕事で皆明日まで戻らないって言ってたし、大丈夫。でも、帰ってきたら例の場所に行ってるって言うておいて」

俺がそう言うのと、蓮華は、溜息を吐いた。いつも通りで呆れが出たのか。それとも、兄貴のためになんで私が――。というため息なのか。それはわからんけど。

「わかった。じゃあね」
「うん」

とりあえず、用件を全部言い終わった俺は、駆け足で訓練場所に向かう。

自棄に不機嫌そうな言い方であったのだが、どうしたんだろう。そんなに、クラスが別なのが嫌だったのか……。だったら、早くヴィオと同じクラスにしてもらう事にしよう。それがいい。



蓮華 Side

「はあ……。全く。なんで父さんに追い付きたいがためにあそこまで必死なんだろう」

「しょうがないよ、蓮華。ファイだって、まだ自分が弱いって思ってるんだし」

リオがそう慰めになってないけど、慰めのように言ってくる。いや。まあ、わかってるんだけどさ。ファイがそこまで必死になるのも、皆を守るためだって。

今日の朝できてなさそうだったし……。私も母さんに何か習って、ファイの手伝いでもしようかな……。

「まあ、ファイ君だって悪気があると思ってるわけじゃないし、ね？」

「そうなんだけどさ……」

ため息を吐いて、少し沈んだ気持ちで私は家に向かう。

▲▼▲

ファイSide

「——ハッ！」

——撃——！——

思い切りのいい呼吸と共に、拳を放つ。今は、あのデバイスのバリアジャケットの上半身の上着だけを脱いで、訓練している。いや、そうでもないとなんかやりづらいつて言うか、なんか汗が付くんだよな。くっつく汗が。それが俺好きじゃないんだよ。

だから、こうやって上半身だけ脱いでやってる。上着は腰に巻いてるんだけどな。毎回思うんだけど、こうやってバリアジャケットになる時に服と違って何処行くんだろうな。毎回気になるんだよな。

「やってんな、ファイ」

「……ノーヴェさん」

俺は振り抜いた姿勢からゆっくりと直立した姿勢に戻る。まだ反

動が体の中にあるから、それを取り除かないと、体の関節がおかしくなるらしい。自分で調べながらやってるからまだわからないことも多いけど。

ノーヴェさんは背中を預けるように木に寄り掛かっていた。手には俺がここで訓練をやるのを見抜いていたかのようにスポーツ飲料があつた。

肩の力を抜いて、関節などをゆっくりと解してる内にノーヴェさんがスポーツ飲料を投げ渡す。俺はそれを受け取り、上着をすぐに羽織る。

去年の暮れくらいだったっけ、ノーヴェさんの会ったの。丁度、ここで訓練してた時に体を壊さないように組んでくれたんだっけ。組手と後は、訓練実習プログラムと。ボロ負けしたっけ。一番最初の時。

「ジジくせえこと考えんなよ、ファイ」

「なんでみんなにこう簡単に思考読まれるんだろうっね」

「わかりやすすぎんだよ。お前の考えは」

「まさか、一番最初に戦った時って……」

「それは違う。戦いの時のお前の顔ってなんかカッコいいんだよ。一片の隙もないって言うかな」

そんなに違うかな。ただ、隙を見せちゃいけないって思って戦ってるだけなんだけど……。そんなに印象違うか。

「それにしても、大人モードでいいのか？ それ」

「まあ、そんな感じです」

俺は苦笑いでそう言う。身長は3回りくらい大きくなって、大人モードって言っても過言ではないと思う。スポーツ飲料を一口煽って、息を吐き出す。汗が頬を伝わって、地面に吸い込まれてい

く。はあ……。生き返る……。なんか隣から視線を感じる……。

顔をノーヴェさんの方に向けると、なんか呆けていた。しかも、俺の方を見て、ボーっと。目の前で手を振ってみても気づかない……。なにを見てるんだろ。

俺はまだ少し冷たいスポーツ飲料をノーヴェさんの頬に当てると、反射なのか、俺の鳩尾に蹴りを入れてきた。
なぜ……？

「いきなりんな事やるな！ ビックリするだろうが！」

「いや、その割には鳩尾に一ミリの誤差も許さない正確な蹴りを入れるんですね……」

「そのくらいでへこたれるようじゃまだ鍛錬が足りてない！ もっと鍛えろ！」

なんでだろ、ちょっと言う言葉が辛辣になってきて……。それにしても腹痛い。予想以上に深く入ったし……。と、その時、俺のカバンの中の携帯端末から音楽が流れる。多分、ハルトさんからだろう。そう言う連絡か、やっぱり。

??? Side

「じゃあ、彼が？」

「ええ。八神元帥の息子さんです」

ファイの訓練風景をかなり遠くから、望遠鏡で覗く人物が二人。一人は、女性。一人は男性。

「おもしろそうね……。彼、入れてみない？」

「無茶言わないでくださいよ。彼はまだ子供です」

女性の提案に男性は望遠鏡で姿を覗きながら、答える。

実を言つと、男の方は正直どっちでもよかった。ただ、自分に面倒事が回るのが嫌なだけだった。それでも表情一つ変えない。

「でも、素質はあるわよ？」

「そりやそうですよ。体の使い方はうまい。けど、実地じゃ何があるかわかんないですからね」

否定はしなかった。男性は、格闘戦だけなら誰にも引けを取らない。そう確信していた。

「じゃあ、ちょっとテストしてみるかな？」

「テスト？」

男性は望遠鏡を外して女性の方を見る。すると「じゃじゃん」などと云って、犯罪者のリストのピックアップを男性に見せつける。うわぁ……。若干ひきつった笑いと、呆れが出てきた。多分、推測の域だけと言っておくか……。と思い、口を開く。

「一応、聞きますが。それは何を表しているんでしょうか？」

「明日、八神元帥の息子さんの妹を拉致って学院に引きこもろうとする犯罪者のリスト」

やっぱりか……。！　ため息が出ると同時に、怒りが出てきた。

「貴方って人は、なんでいつもそうなんですか！　大体、貴方は毎
か——」

「とっつ」

「ぎゃ……！？」

いきなり怒鳴ろうとした男性の言葉を遮り、女性は右手で思いつきり首を締め上げる。そこで言葉は中断された。

一見他から見たら体位は、なんかラッキーかもしれないが、当人は首を正確に締め上げ、殺すか殺さないかの瀬戸際で止めている。しかも、顔は笑顔だが裏はどす黒いものが渦巻いている。

「今、なんか聞こえなかったか？」

「聞こえてないぞ」

「私事です」

後から聞こえてきたのは、ファイ達の声。それを最後まで聞き終え、また訓練を始めた頃を見計らって、首を離す。男性がむせる声をさも楽しそうに観賞した後、一言。

「全くう。君はいつまで経ってもKY男だねえ」

「間延びした声で言うのやめてください」

首をさすりながら涙目となって女性を睨んでいる。男なのに情けない。というツツコミは決してして欲しくない。事件解決数は余裕で1000を超えているのだから。

「とりあえず、今日は退こうかなあ」

「ごめんなさい」

「男がすたるよあ？ そんな風に謝ってちゃあ」

「ともかく、帰りましょう」

男性がそう言って、転移魔法陣を開いて転移すると、一呼吸おい

て女性も転移して、消えていった……。

- - - - -

ファイ「例によつて後書きの時間です」

蓮華「なんか、普通に始まったわね」

ファイ「そうでもしなきゃだめでしょ」

蓮華「一番最後の二人組って誰？」

ファイ「俺が知るか」

蓮華「私だって知らないわよ。だからアンタに聞いてんじやない」

ファイ「もう一度言うようだが、俺は知らんからな」

蓮華「わかつたわよ。後書きなんで質問とか答えたいところなんだけど、でもそんなもんはないんで、作品から召喚しましょう」

ファイ「何を？」

蓮華「召喚」

ファイ「話を聞け」

アインハルト「えつと……。ここは？」

蓮華「この作品のあとがき。さあ、挨拶」

アインハルト「読者のみなさん、こんにちば。アインハルト・ストラストです」

蓮華「はい、ありがとね」

ファイ「んじゃ、次々行くぞ」。とりあえず、この作品の登場人物がよくわからない人がいると思うから、今度から、丸々一話分使つて、登場人物 profile というのをやるらしい」

蓮華「次の話ね。多分」

ファイ「そうだろうな。というわけで、お楽しみに。って言うか、連続して俺らやるんだけどな」

蓮・ハ「嘘っ!？」

ファイ「マジマジ。んじゃ、登場人物 profile に続く!」

第一話―魔法学院とファイの一日―（後書き）

というわけで、profileも参考にしながら、読んでいってください。

登場人物 profile・1 八神 ファイ・S・ハラオウン (前書き)

前回のあとがきからです。

初めて見る人はこつちを先に見た方が……。って、遅いですよね (笑)

というわけで、どぞ♪

登場人物 profile・1 八神 ファイ・S・ハラオウン

ファイ「というわけで、profile第一弾」
ハルト「確かに、これはこれで面白そうですね」
ファイ「面白いもんじゃないぞ？ 俺なんて」
蓮華「やつぱり、できてるんじゃないの？」
ファイ「何でもかんでもそれに繋げるもんじゃねえだろ」
ハルト「それは置いておいて、早くしましうよ」
ファイ「正論だな。んじゃ、大公開」
蓮華（ハルトさん、あんな風に笑ってるの初めて見た……）

Name：八神ファイ・S・ハラオウン

CV：朴 口美（ガンダム／ロラン・セアック、ガンダム種／ニコル・アマルフィ、鋼錬／エド）

Height：160cm

Weight：40kg

Pupil：翡翠

Hair：金色。肩辺りまで伸ばしている。

Class：St・ヒルデ学院・中等科1年生（？）

Device：リサイクルデバイス「ファウスト」

Special skill：料理、カイザーアーツ覇王流

Hobby：鍛練、ストライクアーツ格闘技、勉強

Like：刀、剣

Dislike：なし

Mage Level：AAA（SSS+）

Land Level：AA+（SS+）

Level air combat：A+（SS）

Power Purification：A-（SS）

Close combat Level：AA-（SSS+）

Long-distance race Level：C（B+）

Particular skill：

該当するデータはありません。

Remarks：

とある研究所に收容されていた。弐世代型戦闘機人計画により、

戦闘機人という種になっている。St・ヒルデ学院で、初等科から一気に中等科に飛び級した。ゼロの残した【霸王の断章】に書かれた技をほとんど習得し、接近戦では、アインハルトと同様に組み手をするまでに上達した。ISを使ったオリジナル技も使用する。容姿的には、ゼロとフェイト似で、意外と手先が器用で料理とかの造詣も深かったりする、明るい性格。蓮華に勉強を教えたりする、世話好きな一面もある。

身長は変化させることができ、最大で、190cmの60kgになる。訓練でよく使うのは、170cmの50kg。

ファイ「というわけです。とりあえず、訓練時に体格を変えるのはヴィヴィオと同じ理由です」

ハルト「特殊技能のところに該当するデータはありませんってあるのですが……」

ファイ「まだ見せられないだけ。ネタばれになるじゃん」

ハルト「成程……。楽しみです。今度組手した時に見せてください」

ファイ「ダメ」

蓮華「意外と危ないのよ、コイツ。前なんて能力で殺しかけたことあったし」

ハルト「そんなに危ないんですか……？」

ファイ「少なくとも、本当に自分の緊急事態じゃなきゃ使わないわな」

ハルト「最後の手段って事ですか？」

ファイ「そうなる。さて、そろそろ終わりにするか」

蓮華「私の発言率少ないけど」

ファイ「気にすんなよ。それでは、また次回の更新で会いましょう」

蓮華「流されたし……」

ハルト「また今度」

蓮華「感想とか、質問とか来たらあとがきで答えるからね」

登場人物 profile・1} 八神 ファイ・S・ハラオウン} (後書き)

次回をお楽しみに♪

3 / 3 0 追記：

リサイクルデバイスの名称を変更しました

第二話―鮮血の暗殺部隊（前篇）―（前書き）

無駄に引つ張ってみました今回。

T O U D A 様、キャラ拝借ありがとうございます！

後、キャラのイメージを崩したくない人は、後書きはなるべく見ない方がいいかもしれません。

それでは、無駄に引つ張る気満々の本編をどうぞ。

第二話―鮮血の暗殺部隊（前篇）―

ファイSide

「また、負けたよ……」

「でも、良いところまで行っと思ったよ？ ランさんは」

俺は、ランさんにそう言う。なんだか、先生みたいなこととしてるっていうかな……。説明するのは、めんどくさいので一言にまとめよう。要するに、先生に言われたんだよ。

――ファイは高等科行っても余裕で、学年トップ誇れるぞ。

って。それをどこからか拾ってきた生徒たちは。融通の効かない訳の分かんない先生を軽く放置して、俺に教わってるって訳。

誰だよ。ホントに。正直言って、午前中で気力全部そがれる俺としては嬉しくないんだが。むしろ、邪魔くさいんだが。

「それにしても驚きなのだ、まさかファイ君がそこまで頭良かったなんて」

「正直言って、先生には口に出してほしくなかった」

「なんで？」

「先生の性格からして、絶対に丸投げするから」

「あゝ」

一緒に授業を受けていたランさんにそう言う風に納得する。実際。今日の授業内容は、魔力によるホーミング弾のコントロール実習って感じだった。丸投げする気満々だった先生をひっ捕まえて教えるのに向けさせるのには正直疲れる。

「なんだって俺がこんなことしないといけなんだよ……」

「まあまあ……」

なんかなだめるように流されたが、今は気にしないでおう。気にしてたら俺の疲れがまたたまるだけだし。その時。授業終了のチャイムが鳴り響いた。

「全員集合」。1分以内に終わるぞ」

先生。毎回思うんですけど、それでいいんですか？ なんとなくそれだと駄目な気がします。よく先生になれた様……。めんどくさがり屋は、なんか、教員になれないイメージがあるんだけど………。違うのかな……？

「何考えてるのだ？」

ランさんが俺の方に顔を向けて不思議そうな顔をしていた。やっぱり、顔に出やすい感じなのかな、俺って。少し、将来噓をつけない性格になるのか、不安を隠せない俺ではあったのだけ。

「なんでもないよ」

そう苦笑いで返す。その後に、先生が立ち去ったのを見て、皆ぐったりとしていた。いや、先生の教え方は確かに優秀なんだけど、教え方がスパルタなんだよね。入学初日に先生の座右の銘を教えて貰ったんだけど……。

—— 技は作るんじゃない。作りつつ盗み取る。

先生のいつてる意味がやっとわかってきた。つまりは、教えるって言うのは、途方もなく努力が必要で割に合わないから、強い奴からコツなんかを聞きながら、自分の身につけて事なんだろう。つまりは、ウチの魔導の先生は先生としてのイメージがブレブレ

な人って事だ。自分の事も自分でできなさそうなイメージが強いっていうか。そんなんで本当に大丈夫か……？ テストもだんだん近くなってきたって言うのに。

「次の授業ってなんだっけえ……」

「国語だよ」

「うう……。やだ……。帰りた……」

……ランさんは、本当に勉強する気があるんだろうか……。いや、蓮華も同じこと言うけど、ここまで酷くない。せめて、数学と社会科の時くらいだ。弱音を吐くのは。俺と一緒にやってきたからか、俺より少しは劣るけど、かなり頭は良い。ランさんの成績がどうなるのか少し不安だな……。

「ほら、行くよ。ランさん」

「おぶって」

「……。だれか……。砂持ってきて」

「わああああ！？ 嘘だよ！ 嘘っ！！」

「本当に嘘なのかな……」

「嘘だよッ！ 私は元気っ！！ ほらっ！」

あはは……。なんて扱いやすい人なんだろう……。今、無表情だけど。心の中はすごく苦笑いなんだよ。あ、凄い速さで走っていった……。なんなんだ……。そーいや、俺もやる事あったし、戻りますか……。ゆっくりと歩いて、教室まで戻り始めた……。



「うゝあゝ」

「蓮華ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫じゃない……。かなり無理があるんだけど……」

今日の私は、朝からダウン気味だった。なんか、やる気のかけらも起きない、みたいな感じになってたんだ……。ファイは朝に起こしてから今日全然会ってないし……。訓練ばかりだし……。家にいてもあんまりやる事ないから、勉強して無駄に成績伸びるし……。ある意味悪循環ね……。損すぎる……。はあ……。

「次って何の授業だっけ？」

「確か、クラス合同で魔法実技の――」

「さあ、頑張るかぁ！」

自分でも驚きのテンションの切り替えだった。苦手な社会と数学の時間が過ぎ去った事で、さらにテンションは倍になっていた。なんていったってヴィヴィオ達がいるんだから、安心できる。支えの違いつて、大きいわよね！ うん！

「手を上げる！」

その瞬間に、一気に殺伐とした雰囲気変わった。私がそっちの方を向くと、そこには黒く鈍く光を放つ銃を持った人たちが立っていた。

――偽物、ではないか。

私はそうみた瞬間に判断した。ファイが前父さんの部屋をあさっていた時に銃の凶鑑みたいなのが出てきた事があって、それで使えるかと思って覚えておいたかいがあった。

多分、なにか狙ってこっちに來たんだろうとは容易に想像できる。

だけど、なにが狙いか全く想像もつかなかった。

「八神 蓮華・S・ハラオウン、というガキはいるか？」

「そこに――」

「私よ」

言いきる前に名乗り出た。ヴィヴィオ達いたんだったら、かばうだろうけど、あいにくこの連中は私に対してだけはそうじゃない事がわかってる。だから、あえて言い出た。

その内の一人が私のこめかみに銃口を突き付けたが、動じることしなかった。凄く怖いけど、ここで何かアクションを私がすればそれこそ向こうの思うまま……。だから、必死に怖さを抑えた。

「動じないんだな？ ガキのくせに」

「もつと怖い奴知ってるしね。この程度じゃ動かない」

「ほう……。なら、撃つぞ？」

そう言われて引き金を引く動作には少し肝が冷える……。けど、撃つ筈がない。誰でも撃つ様だったら、私を名指して呼ぶ意味がないから。

いや、逆にして考えれば。今油断させて本当に撃つかもしれないけど。それでも違うと思う。

本当に殺す気で来るなら、名指した直後にこっちを撃つ筈だ……。…。

ここを血濡れにしたくないからどこか別な場所に移すって言うのも、ありかもしれないけど……。それでも。

――絶対に撃たない。

確信があつた――。



ファイSide

（なんでこうなったんだろうな……？）

（私だって知りたいよぉ！）

（私もですよ）

俺はランさんとハルトさんに念話を飛ばした。まあ、簡単に1行で説明できるんだけどさ。単に、授業待ちの数分間の間に、この見るからに犯罪者の集団が入ってきて、俺たちを一か所のところに集めたっただけ。

それでも、教員がいないこの状況では危機的な訳。周りでは、状況が状況だけに泣きかけてる奴もいるし……。どうしたもんかな……。先生たちの事だから、何かアクションを起こしてもおかしくないと思うんだけどな……。

と、その時。放送開始の時のチャイム音が鳴った。嫌な予感しかない。冷や汗が背中を伝う……。

『このSt・ヒルデ学院は、私達が占拠した！ 少しでも動けば、確実に命がなくなると思え！』

……この時点で、変な身動きと増援は封じられたって事だ。

——拙い……！

とっさにそう判断した。俺が頭の中でシュミレーションした中で一番最悪の状況って事だ……。

どうこの状況を切り抜ける……！？　頭の中で思考回路が回転し始めた……。

多分、威圧感を与えるだけとは思わない。何か行動を起こすはずだ……。その前に、使者なんかが出る状況を回避しないと……！



蓮華Side

私は、今犯罪者の内の2人に連れられて、屋上に来ている。その二人は、どこか軍人の様な感じを受ける。……なにをする気だろうか？　そう思っても、聞く事はしない。

聞いたところでまともな答えが返ってくるとは思わないし。それに途中に、職員室よって行ってからこっちに來たから、状況を確認した。どうやら、先生の援護は期待できない様だし。

「さて、ガキ」

「誰の事？　全く見当がつかないんだけど」

「お前の事だ……よッ！！」

— 殴っ！ —

その内の一人が、私に拳を振るってきた。丁度鳩尾に入ったその拳は、肺の中の空気を一気に吐き出させて、私を簡単にダウンさせてきた。

今の一瞬だけで、一気に我慢してた恐怖が表に出てきた……！　足がガクガク震えていた。吐き気がおさまらない……！

—— 怖い……！！ ——

「さっきの威勢はどうした!? オラッ!!」

そして、サッカーボールを扱うように、思いっきり腹を蹴られて、屋上落下を防ぐためのフェンスに叩きつけられてしまう……。

人間って、こんなに簡単に吹っ飛ぶもんなんだなって。改めて思う。立ち上がるうとする、一人が背中を思いっきり踏みつけてきて、立てなくなる……。

「どうしたよ? ANGEL革命の要がコイツとか言ってたけど、全然強くも何もねえじゃねえか!」

「強い奴とは得てしてそうだ。本気は自分では出せない」

「……違いねえな! 弱えよ!」

「ぐう……!」

これじゃあ、一方的ないじめだ……。痛い……。怖いよ……。

——もつと頑張れって。蓮華。お前は俺より強いんだからさ。

鮮烈にやみがえった、アイツの言葉。それを聞いてふざけんなッ! って怒って投げだした事もあったっけ。その時は、前よりわかりやすく丁寧に教えてくれて……。

「ずるいじゃん……。アイツ……」

「あ?」

私は、アイツの言葉を全部信じるわけじゃないけど。けど、結構励ましになるんだよね……。今がその時で。もう一つ教えてくれた事は。自分がどんだけ不利な状況でも、考え方次第で、全然違う。振りでも有利に変わるって事!

「足をどけなさい……! 今すぐ私が強いって証明してあげるから

……!!」

「ハッ！ 試してみろよ!!」

そう叫び、腹を蹴られたが、今度はただやられる訳にはいかなく、足をしっかりホルドした。

そうしたら、今度は逆の足で、思いっきり蹴られて、バキッと、嫌な音が響いた。骨が折れる音。

「うぁ……」

相手の足を掴んでいた力より、痛みの力の方が大きかった。力が抜けて、無常に地面に転がった……。さっき蹴られたところを触ると、鋭い痛みを伴って、血が滲んでいる感触がある。

—— 利き足じゃなかったのか……。さっきまでの蹴りって……

!!

もう、立てるほどの力もない。そんな状況でどうすれっというの

……？ ファイ……。ヴィヴィオ……。!! 助けて……。!!

—— 破! ——

その時、扉が蹴破られて、隣に屋上の扉が転がった。その扉は、頑丈にできているとは考えずらいほどぐにやりと拉げていた。

私を連れてきた二人が銃を構えて、扉の方を向いている。私も痛みを我慢して、ゆっくりとそっちの方を向く。

土煙にも似た埃の煙の中から、出てきた人物には、驚きが隠せないのと、助けに来てくれた……。!! という安心があった。けど……。

「殺せ」

「了解」

— 撃 —

「ぐあ……」

銃弾一発で簡単に倒れてしまう。

—— …… この一方的な暴力はいつまで続くんだろう……？

ファイSide

—— 数分前。

先程の集団にとらえられ、一か所に集まってからすぐに動きが見えた。放送が流れたのだ。本格的に焦ったのはそれだけではない。いや、焦ったのはその後の一言であった。

「初等科の4年の内の一人を拘束させてもらった……？」

つまりは、ヴィヴィオか蓮華だ。どちらも大切な人物の一人。失くしたくないものの一つ焦るのは当然と言える。

その二つに限定しきったのは、この学園の中。しかも初等科という限定された状況の中で、狙われるのは、確実に特別な何かを持っている二人と。そう推理できるのは簡単な事だからだ。

（あんまりいい塩梅は期待できないな……）

ファイはここで頼りになりそうなアインハルトに念話を飛ばす。だが、これは彼の中でもちよつとした気休めでしかなかった。彼女

なら何か案をくれる、なんてことはないのだから。
それほどまでにこの状況を打開したかった。

（どういう意味です？）

アインハルトがファイの方に少しだけ顔を向けてそう聞いてくる。
隠した方がいい事もある。だが、今この状況だったら。そう考えた時、情報が欲しいに決まってる。

いつ解放されるのか。

今、助かりそうな状況なのか。

その他にも、考えられるような不安と欲はたくさんある。

——ハルトさんも平静を装っているが、知りたいはず。

だからこそ、ファイは素直に話す。

（拘束じゃなくて、暴力に走ってる……）

（っ！？）

ファイの言葉から結果が出た瞬間に、アインハルトの表情には電撃が走った様な動揺が見て取れた。だが……。

「そこ！ 何してやがる！」

——裏目に出た。

一人が気付き、銃を発砲され、ファイの左肩に当たる。彼は一瞬顔を歪めたが倒れたりという行動までには至らなかった。本当は、倒れたいほど痛くてたまらないはずなのに。

人を心配させる訳にはいかない、と。そう思い、倒れずに立っていた。左の肩から生温かい液体が静かに流れていく感触を彼は感じ

ていた。

その血が流れていく時間に比例して、だんだんと頭が冴えて、冷静になっていく。そして、なんでもなくこの事態を収束できる事に気づいた。

——そうか……。こうすれば簡単に收拾がつく……。！！

それをやるために何か大きな破裂音が必要になり。そう考えたファイは自分の体全体に薄く魔力を流す。

何か大きな破裂音がして、尚且つ気が引けるようなもの……。そう思って探す。何かあれば、体に違和感が出てくるはずだからだ。だが、何もない。ポケットには、胸には自分が唯一使えるデバイスがある。だが、それでどうにかなるような状況ではない。

——何もない……。だったら！

なければ作ればいい。ファイはそう考えて、やめた。今の状況の中で、そんな事をすれば、確実に殺されると悟ったからだ。自分が可愛いというのもあるが、これ以上被害を増やしたくない。そう思う方が強かったからだ。

——……。だが……。！！

そう思っているからこそ。事態を進展させるために行動するべき。そう割り切ったファイは、自分の胸にあったペンダントを引きちぎり、魔力を少しだけこめて、適当な窓に狙いを定める。

——うまく行って欲しいが……。いや、行かせる！！

ファイは、あえて。左肩で思いっきり自分のデバイスを投げる！

肩の痛みが自身を挟るように疼き、痛む。

だが、狙いはそれほどずれた訳ではなく窓ガラスを割って外に飛び出る。窓ガラスが割れる音で、彼らを取り囲んでいる銃を持つ犯罪者は一斉に音のした方へと銃を向けた。

ファイが狙ったのは、一番遠い窓。ここまでは計算通り。固まっている場所は、窓側の教卓側。それこそ、絶対に狙えない様な場所に投げる事によって注意を引いたのだ。

——デバイスの形が、完全な球形じゃなくて助かった……。

そう思うのは、手首のスナップで回転をかけたからだ。スナップだけで軌道を曲げ、一番遠くの窓を割る。一見難しい事だ。

だが、案外これがするつと行くのは技術が高いという事もあるが野球でいう変化球の方が難しいというのも関係している。

つまり、完全な球形は軌道を曲げ、変化球にするよりまっすぐ投げた方が安定する。

——本当に、相手の気を引くのはここからなんだけどな……。

肩の力を出来るだけ抜き、デバイスに仕込んであった魔法の一つを発動する。詠唱が不要な簡単なものを。

——爆——閃——

『ッ——！』

低く轟く爆発音。それと同時に、辺りを真昼以上に強い光が教室を包み込む。皆、目を塞いで、その光から身を守った。

——たった一人を除いて。

「おい！ 何があっ……」

犯罪者の一人は、そこで言葉が詰まってしまった。それもそのはず。今の数秒だけで、一緒にここにいたはずの仲間が制圧されていたのだから。しかも。一人によって。

「……此処まで呆気ないと、なんか蓮華一人で解決できるような気がしてきた」

「——っ！？」

拳を振り抜いた状態で、そこに立っていたのは、紛れもなく、大人といえるほどの身長ファイであった。

——いつの間に侵入した！？

焦りがまず最初に来た。その人物は口で右手のグローブを少し支え、憑きだす様にして自分に合わせた。

普通なら、左手を使うはず。そこにいた犯罪者はそう思って左腕を観察し。左肩から、血が出ているのを見て。

「……ハハッ……！」

いきなり笑い始めた。そして、銃口を彼の方に向けて。まだ笑っている。その声は妙に恐怖に震えている声色であった。

「お前を殺せばいいんだ……。そうしたら、俺は……！！」

ファイは手を開いたり閉じたりして、感覚を取り戻す。そして、拳を握り自分に向けられている銃口を睨みつける。

その睨みでさらに恐怖が増したのか、手が震え、一步下がる時に、

仲間につけ掛かり尻もちをついてしまった。それと同時に、持っていた銃も転がってしまふ。犯罪者は懷からナイフを取り出す。ファイが一步近づく度に、来るな！ 来るな！！ と叫んでいる。

「じゃあ、ちよいと眠つてろ」

ファイはそう言うと、犯罪者の首の脊髓めがけてかかと落としを浴びせる。犯罪者はナイフを持っていて地面を地に落とし、泡を吹いて気絶した。

「俺を殺すなら、もうちょつと精神面を鍛えるべきだな。犯罪者」

そうして、ファイは首から足を下ろし、大人化を解除する。皆の顔が歡喜に包まれかけているのを見て、ファイは自分の口元に右手の人差し指を立てる。それでその場にいた全員が、今騒いではないことを改めて認識し、喜びの顔が消えた。

ファイはそれを見て、欲臨機応変でやってくれたな……。と。彼は足音を立てずに、皆に近づいて笑顔を見せる。左肩を撃ち抜かれてからの笑顔なんて、無理してるだけと。皆簡単にわかっていた。ファイもそれは重々承知で、口を開いた。

「皆にしかできない事、頼んでいいか？」

「何？ 私達にしかできない事って……」

「……ここで、喋り声一つ出さずに、待機してて欲しい」

そんな事を言うとは思ってはなく、驚きに顔が染まったと同時にファイなら任せても大丈夫かもしれない。そう言っしょうがなさがあった。

だが、一人だけ。それに反対する。

「そんな事して、何になるの……」

「ランさん……」

ファイは、反対してきた者の名前を呼ぶ。正直、まさかランが反抗するはずが……。と思っていた彼だが。逆だった。怪我をしてまで助けてくれたからこそ。この反応。

少し天井を仰ぎ見て、不敵な笑みを浮かべた。

「どうしようもなく駄目な妹がいるんでね」

「それは理由にならない……。ならないんだ……」

「そうだな。けど、正論なんてかましても苛つくだけだし。俺は俺で。ランさんはランさんだ。大丈夫。すぐに戻って来れるさ」

そう言つて、怪我をしていない右腕で、そつと撫でる。身長差からか、少し撫でるのが楽だな。とファイは感じていた。そして、手をランの頭から離し一歩下がって大人化する。

「じゃあ、行ってくるから言つたとおりをお願いな」

そう言い残して、彼は足早に教室を去っていった。外は彼が出ていった瞬間に怒号と銃声と欧打音が響く戦場になっていた。

気を引くための囃。同時に、自分が胸に思い描く使命感に逆らうことなく進むファイは残った皆からすれば、カッコいいものだが。同時に、不安にもなる。

「大丈夫ですかね……。ファイさん……」

「大丈夫だよ。ハルトさん」

「ランさん……」

「心配するほど、弱くはないんだ。ファイ君は……！」

そうアインハルトに自信を持つていうランは、説得力があった。さつきまで不安そうに涙を流していたのに、なぜかそう感じる。その力に気付いたアインハルトは、少し俯いて、呟く。

「……そうですね」

——そんな事、自分が一番傍にいたから、わかってるじゃないか……。

彼女は胸の前で右手をそっと握りしめた……。
ただ、無事を祈って——。



ファイSide

「——っ。——っ」

俺は、教室を出てから、ずっと戦いつぱなしだった。今は中等科の生徒玄関。教室や職員室全部回って斃して、正直言っただけでクタクタだった。あれだ。例えるなら、ヴィータ姉と蓮華が毎回なべの時に残す白菜くらいにクタクタだ……。

啖呵みたいな切っけ出てきたけど、想像以上に疲れた。主に精神的にな。

今回に至っては特にそうだ。左肩負傷。気を使って戦うのと、さらに敵を殺さない様に。だけど、すぐに復活する様じゃ駄目だから、半殺し状態にしないやいけないう二重の疲労が。特に精神面を痛みつける。

休憩したいところだが、そこまで時間がないのが現実。かなり小さくはあるが、欧打音の様なものが聞こえる。

「じつとしていられる訳ないよな……！！」

ともかく。中から侵入してそのまま制圧しよう。そう思い、また初等科の方を向き直す。やっぱり、戦闘は避けられない。けど、戦闘をして傷つけるのは、どうかと思う自分もいたりする。

「頑張らねえとな。初等科なら、怯えまくってる奴もいるだろうしな」

俺が壁を背中に預けるのをやめ、初等科に向かうと。目の前には、銃を構えた犯罪者が俺を取り囲んでいた。ここで発砲されるのは非常に危険だと判断した。

俺は引き返したが、また同じように取り囲まれていた。

「動くな」

どうやら、袋のねずみ状態らしい。一匹残らず蹴散らしたが、援軍までは計算に入ってなかった……。我ながら失策……。

「絶体絶命って奴かよ……」

——どうする、かな。

．．．Go for next！

▼ ▼

蓮華「シリアスな空気をぶち殺す！ 後書きの時間です」
ファイ「さて、今日はお客さんが来てくれてるそうです」

蓮華「スルーかよ」

ファイ「まあまあ。とりあえず、蓮華に言いたい事があるらしいな？」

蓮華「私に？」

ファイ「ああ」

蓮華「ここでは完全無欠の私に何の用かしら！？」

ファイ「それでは、出てきてもらうか。魔法少女リリカルなのは S・freedom の阿部兄弟です！」

蓮華「ゲ……！」

阿部（兄）「おう！ 来てやったぜ！ か弱い陰陽師の阿部隆ひー

——」

蓮華「今日ありがとうございました」

阿部（兄）「待てゴラ！ ちゃんとおいらに自己紹介させる——！」

蓮華「今日は、阿部晶彦君を呼んだつもりなんだけど……」

阿部（兄）「フフフ……。蓮華あ、ホントは freedom の後書き（本拠地）で、新術を見せるつもりだったが気分が変わった……

……。今見せてやるよ……！」

蓮華「上等じゃない……。かかってきなさいよ……！」

阿部（兄）「行くぞ、このアホ尼ああああ——！」

——撃————射————

ファイ「なんか、向こうで戦闘開始しちゃったようなので、こっちはこっちで和みましょう」

何処からかは知らないが、執事服を着てお茶を出しているファイ。

晶彦「あ、ありがとうございます」

ファイ「いえいえ」

そして、それを受け取った事を確認すると、反対側に座る。

ファイ「この前の感想では申し訳ありませんでした。晶彦さん」

晶彦「えっと、敬語じゃなくても良いよ？ 年も同じくらいだし…

…ね？」

ファイ「あ、ちなみに背は高いですけど年下ですよ？」

晶彦「え？ そうなの？」

ファイ「背だけで基準を決めちゃいけないのは、弟である晶彦さんが一番わかってると思うたんですけどね」

一口紅茶を嚙って微笑むファイ。その顔は、中世的な顔立ちからか、女性と見間違えてしまうほど綺麗だった。

晶彦「一つ質問いい？」

ファイ「なんですか？」

晶彦「オトコノコですか？」

ファイ「はい。確かに、オトコノコですよ」

晶彦「じゃあ、来た時にメイド服を着せる用意をしないと……！」

ファイ「待つてください」

晶彦の発言に嫌な予感を覚えたファイは額に汗を掻きながら、携帯電話を取り出して誰かに電話しようとする晶彦を止める。

晶彦「ん？」

ファイ「一応、オトコノコの字を教えてもらえませんか？」

晶彦「【男】の【子供】だよ？」

ファイ「嘘だっ！！」

某鉈女を連想させる様な台詞をファイが叫んだ後に、晶彦も同じように叫ぶ！

晶彦「嘘じゃないよ！ ファイ君、僕のこの目が嘘をついている目に見える！？」

ファイ「見えませんが……」

晶彦「なら、信じてよー！」

ファイ「わかりました……。信じましょう」

晶彦「（よしっ！）これで、フラグは完璧！！」

蓮華「ファイい……」

ファイ「蓮華？」

蓮華「……えぐッ……」

ファイ「泣いてる！？ どうしたんだ！？」

蓮華「隆浩に……私の貞操を汚されたあ……！！」

ファイ「ほう……！」

ファイはゆらりと立ち上がり、デバイスを展開する。

晶彦「うわっ！？ ファイ君がどす黒いオーラを放ってお兄ちゃんに近づいてる！！」

隆浩「待て！ 落ち着け！！」

ファイ「妹に何してくれてんだ……。隆浩……」

晶彦「もはや口調まで変わってる！？」

隆浩「違ああうー！！ 話を聞け！ ファイー！！ か弱いおいらをいたぶるのか！？」

ファイ「知ったこっちゃないぜ」

隆浩「それでも主人公か！！」

蓮華・ファイ「お前だけには言われたくない！！」

晶彦「あ……。まあ、確かに……」

隆浩「晶彦おおー！！ せめてフォローしてくれ！」

晶彦「ごめん、お兄ちゃん……」

ファイ「覚悟は決まったな？」

隆浩「決まって——」

ファイ「さあ、逝こうか」

隆浩「字が違あああああああうー!」

ファイ「トラウマ植えつけてやんよ」

——ズルズルズル……。ボタン!

隆浩「ぎゃあああああああああああ!」

晶彦「僕、ファイだけは怒らせないようにしようかな……」

蓮華「懸命ね。さて、ずるずる引っ張ってきたけど、今日は楽しかった?」

晶彦「凄く楽しかったよ（そして、これからも）」

蓮華「メイド化計画でも立ててるの?」

晶彦「よくわかったね。参加する?」

蓮華「ええ♪ でも、メイドするなら——」

——1時間後。

ファイ「反省したか?」

隆浩「はい……」

蓮華「お帰り〜」

ファイ「ん……。もうそろそろ時間だな」

蓮華「そうね」

晶彦「じゃあ、ツインテ巫女メイドでおっけーなんだよね?」

蓮華「そうね♪」

ファイ「メイドロボでも作るのか?」

蓮華「そんなところよ♪」

ファイ「そうか。じゃあ、また向こうの後書きで♪」

晶彦「うん♪（フツフツ。自分がそうなる事も知らずに……!）」

蓮華「またね♪（ん〜。肩の力抜かせるのにはちょうどいい企画か

も。ついでだから女体化魔法も……」

隆浩「もう一生きたくない……」

ファイ「んじゃ、次回は、第二話の後篇！」

蓮華「未来を拓くのは——」

『君だっ！！』

第二話―鮮血の暗殺部隊（前篇）―（後書き）

此処まで読んでくれた読者様。ありがとうございます。

よかったら、評価とお気に入り感想をお願いします。

できれば、此処はこうしたほうがいいっていうアドバイスもお願いします。

無言のプレッシャーには弱いんです。

第二話―鮮血の暗殺部隊（後篇）―（前書き）

ちよつとgagagaな臭いが否めないですね。

意見、質問等があったら、感想、メッセージを送ってください！

第二話―鮮血の暗殺部隊（後篇）―

空気が少しずつ渴き始めてきた。俺の緊張の度合いが現れているのかよくわからないけど。とりあえず、この状況を打開する一手が欲しい。だけど、こんな状況じゃ落ち着いて考えてもいられない……。

拳を握りしめて臨戦体制を整えながら、戦力状況を確認する。後ろは魔法を気付かれないように使いながら確認していると、一言言われた。

「万策尽きたか？ 八神」

「さあね？ どの道あんた等倒さなきゃいけないしさ。考え中だよ」

俺はそう言った直後に戦力の検討をつけた。今この周辺にいるのは7人。全員、こっちの方に銃を向けていて、6人が俺を取り囲む形。もう一人が主格と思われる一人で、そいつはこっちに銃を向けている、というよりもその他の何かに向けて警戒をしているという感じだ。

まあ、正直言つて、こっちから見ると俺を子供だから侮っているという感じを決意表明よろしくさらけ出してるんだけどな。けど、あながち間違いじゃないのも確か。策なんて思いつかないし。

どうしたもんかな。妙案は思いつかないし。隙は見せてくれないしなあ……。と、途方に暮れていると。

（ファイ、ファイ。聞こえるなら返事をして）

と、聞き覚えのある声が耳に届いた。少し頭の位置が動いたからか、他の奴等が標準をこちらに向けている標準をしっかりとしたものになっている。策を考えるのに頭を使いながら念話に答える。

(聞こえるよ、ファイト母さん)

(よかった……。でも、蓮華に反応がない。ファイ、わからない?)

蓮華に反応がない。それは俺も今聞かなきゃわかんなかった事で、内心かなり動揺している。心音もバクバクいつてるし……。そのせいで悲観的になった頭は一つの結論にたどりつかせてくれた。

だが、それを言うかどうか、迷った。言ってしまうえば、楽な事に変わりはないはずだろう。けど母さんはどうなる? 多分、すぐにこっちに駆け付けようとするだろう。母さんは来ても大丈夫だろう。問題は、そのほかの人たちだ。AMFが全体に張られてるから多分速攻で発砲されるだろう。そしたら、俺の特攻もおとなく水の泡となる事だろう。

そうならないためにも。俺は意を決していった。

(多分、けど。気を失ってると思う。だから反応がないんだ)

(気を失って……! それってどういう——!)

(落ち着いて。ちゃんと理由はある。根拠も一応。けど、今ここで発狂はされたくないから言わない)

(けど!)

(ヴィヴィオもいる)

(——っ!)

なんとか踏みとどまってくれたみたいで、しばらく沈黙が続く。今なら、吐く息すらも正確に再現できると思う。めっちゃくちゃ力入ってて、今運転しているだろう車のハンドルを握る力もかなり強くなってる。

(わかったよ。けど、どうするの?)

(そこなんだよねえ……)

（え？　ってことはもしかして……）

（言いたくないけど、すっごいピンチって奴です）

そうした瞬間にいきなり途切れた。多分、念話を切ってどうしようか考えている、という感じだと思うけど……。いや、それは無いか。

（無事に帰って来れると思わないでよ？）

（そりゃもう）

凄く怒ってるし。これはさっさと制圧するしかない。戦闘中に説教とか呑気にやるほど母さん方はアホじゃないけど。でも、急がないと俺より蓮華がお陀仏になりそうだし。もう一度策を考えよう。

まずは、気絶させる。その手は一応あるんだけど、訓練して使えるようになったアレは、俺に対する負担がでかすぎるから却下したい。

次に、全員殺す。それも良いんだけど、一応人の命だしな。それをやっちゃうと正当防衛とはいえ、俺の首が飛びかねない。

「どうすっかな……」

父さんみたく出鱈目にポンポン出てくるはずないしな。展開はできてるんだけど、それを弄れる頭がないってのはきつい。魔法も使えないし。一本道だったから、罫は仕掛けてないし。

まあ、やむを得ない事は確かだし。魔力なんて、補給はどうにでもなる。俺は精神を研ぎ澄ます。

「フウ——」

そうして体の力を抜く。パチパチと、体に静電気が纏われていく。

プラズマは軽く火傷する事もあるし、気をつけないといけないからな。そもそも、あれは自分の体温なんかを徐々に上げていつて、原子に分離することだしな……。それは数千万から数億の温度を必要とするし、俺だってこれを習得するのに、3年半かったし。

「何をしてる？」

「さて、なんでしような？」

バチバチと音が確かに響いて、俺を中心に風が渦を巻いている。汗が出てくる。急激な体温上昇のためだろうか。多分それだな。

俺は右手をゆっくりと目の前にだし、ボールを持つような形に手を開く。その中で電撃がいくつも走り、風がその中を吹き荒れる。俺の頭の髪も吹き飛びそうなくらいだ。

それを見た目の前の奴は俺が何かをする事は表情で感じ取ったらしく、銃のトリガーガードから他の奴らが指を外した。

失敗はできないぞ、ファイ。失敗した瞬間俺の命が飛ぶ。焦るな。銃を向けられたからって、速攻撃たれる義理はないはずだ……。

「……撃て」

そう言われた奴らは一斉に俺に砲撃してきた。俺に向かって。読みが甘かったか。速攻で撃たれた……。ある意味好都合かもな。無理矢理な精製でわざと失敗してそこらへん一帯を火の海にするのもありだし。

—ズガガッ！—

そうやって撃たれた俺は、姿勢を崩して精製中のプラズマを放り投げた。それを見た奴等は逃げだそうとするが——。

—シュル……。—

「俺一人じゃ死なねえし」

「なッ……！？」

バインドをかけられた犯罪者たちはもがくが、そのバインドは外れない。俺がそいつをかけたんだ。簡単に抜け出られてもらうと、俺が困る。そもそも制圧するための一手なんだしな。

落ちてくるプラズマ爆弾。まあ、広範囲が焼ける事は多分確かだろうな。遺書の一つもロクに書いてないしな。蓮華とかには申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

（母さん方、ちょいとしくったよ……。悪い）

カシャン、とプラズマ弾が割れる音が響く——。

「爆発です！！ 学院内で爆発が起きました！！ この状態で犯人は——」

今のフェイトには、車載のオーディオから発せられるラジオの音は耳に届かなかった。そればかりか、さらに気がかりが増える。フアイは、「行くな」とは言っていたがその制止さえ。

「なんで、なんで私はいつも……！！」

彼女のハンドルを握る力がさらに強くなる。それと同時にアクセルを踏み込み、周りの風景の流れていく速度が速くなる。道路交通法を超えない程度の速度で走っているのは流石、というところだ。

”いつも”。自分で助けるって言うておきながら、肝心なところで助けられない。それがどうしようもなく悔しかった。

中学2年生の時。親友である高町なのはが大怪我をしたと聞かされ。怒れるほどに後悔した。なんで、自分が傍にいてあげられなかったのか。傍にいてあげれば、助けられたのじゃないか。それは彼女が気丈に振る舞えば振る舞うほど加速していった。

ゼロの時も。急いで脱出してくれと。そう言われて、言うとおりに脱出した。だが、その後に彼は死んだ。彼を守ると心に決めたのに。それなのに、彼は。自分を犠牲にしまった。悔やんでも悔やみきれなかった。

——私はいつもこう。平和になり過ぎてる……！

そうして、今は愛おしい我が子を失おうとしている。それが許せなかった。自分が平和につかり過ぎて危機管理能力が衰えている事がわかっていた。

そうしている間に、St・ヒルデ魔法学院と、限界区域までの境界線についていた。車外に降りると、地面の音とその他に力チ、という音がした。

そこには、誰のものかわからないペンダントが落ちていた。十字架がかたどられているそれにはどこか見覚えがあった。よく思いだせないが、どこかで絶対に見たと思う形のもの。

「何処だったっけ……？」

そう思わずの呟きが聞こえたのか、傍にいた何人かが、フェイトのそばによって、そのペンダントを拾い上げる。罅だらけのそれは、字なんて書いてあっても読めそうにないが、その中の一人がペンダントに刻まれていた文字を読み上げる。

「父さんに……会えますように……？」
「っ！」

それはいつもファイのノートに書かれているものだった。名前のほかに、彼がいつも書いている願い事。そうやって書いた願い事は叶うと信じていたから。それは目標であり、願いごと。

それがあるという事はここまでひび割れるほどの危険に身を投じているという事だ。フェイトは「KEEP OUT」と書かれた最前線を飛び越えた。

——ファイ、蓮華！

二人のことしか頭になかった。

飛び越え、走る、走る！

ファイを蓮華を助けるために！

一心不乱に駆け抜ける！

「残念ながら、通す訳にはいかない。フェイト執務官」

その声が聞こえると、フェイトは一瞬立ち止まり、辺りを見渡した。どこから声がしたのか。そして、その姿を見つけて、聞きだすため。なぜ今止めたのか。決まっているのはわかっているが。

「どこにいる！」

「貴公の後ろだ」

そう言われ、振り向くと漆黒のローブに身を包んだ男がいきなり目の前に現れた。フェイトは顔をしっかりと見ようと目を凝らす、フードに隠れて顔は見えない。

その男は、自分の顔を見ようとする彼女の姿に気付き、フツと嘲

笑を浮かべる。そして、腰に手を伸ばし、黒光りする銃を取り出す。彼女はそれに気付いたが早いか、バックステップで距離をとる。

「怖いのか？　それで二児の母が務まるとはな」

「貴方に何がわかる！！」

確かに、それはそうだ。自分たちを全く知らない赤の他人にそのような事を言われれば、怒り心頭にもなる。

その男は、銃を持ちながら、自分の顎に手を当てる。面白そうに彼女を見ている。今度は嘲笑ではない笑いを見せる。

――ゾクリ――

彼女の背中にとてつもない悪寒が走った。口の輪郭の形だけを見ていると、とても吊りあがっていて気味が悪い。

――この男と、今戦ってはいけない。

蛇に睨まれた蛙だった。足がすくんで全く動かなくなっていた。男が足を振りあげると、ナイフが飛び出た。そのナイフを滞空中、得物に器用にとりつける。

一見すると、銃を横に振り抜いただけ。だが、しっかりと止まっていた。その得物。ゆっくりと正眼に構える。

「……？」

「どうした？」

「貴方、左腕は？」

「さあ、どうしただろうなあ？」

問を問で返すやり取りが何回か続いた後、沈黙。男は銃を構えたまま動かず、フェイトは少し思考を巡らせていた。左腕の存在を。そして、武装を展開するかを。

男は唐突に彼女に武器を向けるのを止め、歩き出した。それを見て自分の相棒を準備し、身構える。しかし、男は彼女を通り過ぎた。その時彼女の瞳に表情が見えたが笑っていなかった。むしろ、何か別な目的があるように歩き去っていった。

「今度こそ、俺の役目が終わるのか……？」

そう呟き。そしてフェイトはその背中を見ているだけであった。

▼▲▼

「うあ……」

俺はまだ痛い体を無理矢理には起こせずに、空を見上げた。爆発の影響でずいぶん遠くに飛ばされたのか、それとも、中心に丁度いたおかげでこの程度の傷で済んだのかは分らん。だけど、急ぎたい時に急げないってちよいと辛いよな……。

「畜生め……」

「ん？ 気がついたのかなあ？」

少し間延びした声とともにこちらの顔を見下ろす女性。というより、顔がかなり近いのはどういう事だろう？ それに、さっきから思っていたのだが、後頭部が生ぬるい。これに合わせて、顔が近いという事を合わせると……。

「考え事してる時って、頭ってすごく重くなるんだよね？」

「やっぱりか……」

俺はすかさず飛び起きて、距離を取って構えをとる前に、ぶつ倒

れた。というよりも。かなり痛かった。痛すぎた。死にそうなくらいだ。

したがって、只今絶賛痛みに悶えている訳であります。体のあちこちが痛い。その時にちらっと見えただけ、包帯巻いてくれてたんだな。

「大丈夫かしらあ？　今正直になればおねーさんの抱擁サービス付きだよ？」

「結構。どの道走らなきゃいけないから、立ち止まったらられない」「そう」　まあ、痛いのは走ってる内に直ると思うから、治ったと思ったら包帯緩めてねえ」　じゃあ、そう言う事でえ」

そう言っただけの女性はロングスカートをつまんで俺に軽く会釈をすると、転移していったのか、いつの間にか消えていた。

俺はこの場所を確認する。中等科の屋上らしい。ここからまた初等科に走ろうと思って扉に手をかけた。だが、その扉は開かず、初等科の方を見つめる。ここからでは角度的に、屋上を見ることはできない。けど、初等科までなら飛べば何とか届きそうな距離。

行くべきか。決まってる。ここで行かなくちゃいけないんだよ。

俺は数歩下がり、クラウチングスタートの形をとる。距離はばっちり。後は、俺の気合でカバーする。今になって、凄イスタートに不安が出てきたぞ……。いや、大丈夫なはずなんだ。

「行くぞ……！」

俺は屋上を駆け抜け、金網をスピードを緩めずに上って、走り幅跳びの要領で、初等科の方に飛んだ。滞空時間はかなり余裕がある。壁に着地できればそれで問題はない。窓を突き破ったら……。そんな時は潰すか。

前を見て、落下地点を軽く予想する。いや、落ちるんだったら、

何処が良い？　みたいな感じで眺めていた。その結果が幸か不幸か、初等科4年生の教室。

侵入方法は、窓ガラスを割って入る。どこぞのアクション映画よろしく、な。俺はガラス片から身を守るために守りの構えに入る。

「流石にこええなあ……」

ガシャアン！！　窓ガラスが盛大に割れ、俺は初等科の教室に入れた形になった。ガラスの破片が辺りに飛び散っている中、犯罪者の一人と目があつた。

窓から突入したのは予想外だったのか、目をまんまるに見開いていた。今のうちに、何事もなかったかのように外に出る。扉を閉めた瞬間に思いつきり足を踏み込んで走り出す！！

なんかギャグ漫画の様な展開だがそこは気にするな。俺が教室を走り抜けたあたりから、色々と出てきたが俺は構わず走り抜ける。幸いにも、教室の位置的に階段に一番近かったため、上がってしまえば一気に袋叩きにできるな。そう思って、階段を一気に登って踊り場に出る。壁に張ってあつたA M Fは昇ってくる途中にボロボロにしてきたから大丈夫だ。

「でも消耗が激しいから、ちょっとここで挟まれるのもつらいし」

俺は、若干独り言じみた事を呟きながら、衣服の上着を脱ぎ捨てる。もちろん、裸じゃなくて防弾仕様のタンクトップ装備してるから少しだけ安全。とはいえ、かなり怖い事は確実なんだけど。

そんな思考が頭によぎっているが、俺は平手をXの字の様に重ね、その部分に魔力を注ぎ込む。それが終わったところにちょうどさっきの奴等が階段の方に全員でやってきた。

「撃——」

「遅いよ」

言いきる前に、俺の手の中の魔法を放った――。



「ああ、コイツ使い物になんないぜ？」

「気絶しているな。そこらへんに縛っておけ」

……痛い。屋上に連れて来られて、骨は折られて、手は化膿してグズグズ……。腕は折られて使い物にならないし……。これからまたどんな辛い事をされるんだろう？ これ以上はもう嫌だよ……。続くくらいなら、消えてなくなりたいよお……。

「お前の言う勇者様って言うのはそこに死んでる情けないのか？」

そう言つて、目の前の奴は私の顎を死んでいる人達の方へ向けた。もう動かない人。改めてみると呆気ないものだと思う。急所を撃ち抜かれただけで死んでしまう。私もこんな奴等につかまらないであの人達みたく死ねたら、どれだけ楽だろうと思う。

「目が死んでやがるな。怖がりもしねえ」

「痛みつけすぎたんですよ」

可哀そうの一つもない様な無常な声が私の耳に届く。ファイ、こんなに情けない私の姿見たらなんて言うだろうな？

「なら、お前らと同じ目にあわせてやるよ？ 親切だろう？」

「ああ、よろしくお願いするぜ――って！」

「いつの間に――」
「うらっ!!」

聞き覚えのあったようなない様な声。その後二人倒れたような音と、手に付いたほこりを払うような乾いた音が聞こえた。そして、そいつは私の近くまで寄ると腰を下ろした。

「しかしなあ。ここに拉致しに来た集団は頭がいいのか、馬鹿なのかわからんな。蓮華、無事か？」

そして、振り向いて。凄く驚いた。そこにいたのは、紛れもなく私の兄貴のファイだったから。

ファイは、私が縛られている事に気付いて、手首に巻いてあったロープを外した。その瞬間にこのファイは本物なんだっていう事がわかって、胸が締め付けられるように痛かった。

「うわっ!?! よく見たら怪我だらけじゃねえか! 大丈夫かよ?」
「大丈夫じゃないわよ……! なんでもっと早くに助けてくれなかったの……!?!」

本当は嬉しいのに、怒りの捌け口になってしまいそうだった。ファイは何も悪くないのに。ファイも私の言葉を聞いて失望したのかもしれない。助けない方がよかったのかもって。

けど、ファイは私のそれを聞いて優しく抱きしめてくれた。多分、一番心が痛んでるのはファイ自身で、私じゃない。

「心配させんなよ。バカ。それと、ごめん……。もっと早く来てれば、こんなに傷つかないで済んだはずなのにな……。!」

「ホントだよ、バカあ……。ぐすっ……」

「今は泣いていい。痛かったんだったら、俺が傍にいてやるから」

「痛くなんて……」

そうは言うけど、やっぱり痛かった。体はボロボロ、心は罪悪感で凄く辛い。そんな時に泣いて良いつて、言ってくれて本当は嬉しい。だけど。今ここで泣いちゃったら、的にも見つかってファイの迷惑になるんじゃないかと思つて心配になる。

「我慢すんなよ。ここなら大丈夫。敵はバインドで縛つてきてるし。だから、大丈夫」

そうやって、怪我人の私相手に少しだけ抱く力を強めてきた。そんな風にされたら、痛い。けど、心地よい痛さだった。ファイの体の温度が一番感じられる。そんな痛さ。私は堪えられなくなつて。

「うああああ——！」

顔をぐしゃぐしゃにして泣いた。

ありがとう。感謝の言葉はその涙の中に入っていたんだ。痛さと辛さ。それは、涙に交じつて、私から出ていったのだろう。私は泣き続けた——。



先日起こつた事件だが、俺が蓮華を慰めてる間に収束した。みたいな感じになつていたそう。俺は局の人に今日の事は口外しないように口止めされて、その日のうちに色々誓約書なんか書かされて解放になった。

ちなみにその時刻は、午後6時。学校は解放された瞬間に下校となった。

「んじゃ、気をつけて帰れよお前ら」
『はい!』

まあ、今じゃ俺らもそんな事件なんて無かったかのようにいつもの日を過ごしている。俺も含めて、な。

その点については少し不安も残ってる。これは序章で、まだ本編が続いてる感じがするから。それは、きつと蓮華……いや、俺たちも巻き込むに違いない事は確か。

「ファイさん」

「ん。じゃあ、帰りましょうか」

「はい」

俺はハルトさんを連れていく形で教室を後にする。その後、少し考えた。どの道、また別の奴らがやってくる。その時に自分は友達を守るために拳を振るう事が出来るか。その事を。正直言って、無理だ。いざその時になれば、足がガタガタで、動けなくなるんだろ。

「はあ……」

「どうしたんですか？」

「いや、この前みたいな事があつたらみんな守れっかなって。正直言って、この前の俺であれだけボロボロだったし。今回はあつけなかったからよかったけどってね。まあ、考えてても仕方がないし」

そうやって俺は作り笑顔でごまかして、また歩く。正直言って、今こんな話されても不安になるだけだし。

結構気にしてる部分も多い。ハルトさんとヴィヴィオは俺の用事が終わるまで待っていてくれて謝ってくれたし。って、この表現はおかしいんだけど……。まあいいや。

「今日も蓮華さんのところに？」

「ああ。練習よりも、家族の方行った方がいいだろ。ノーヴェさんもそうすれって言ってたしな」

という訳で、説明し忘れた日課というか。とりあえず、最近は病院に足を運んで蓮華と会っている。ほとんど初等科で渡されたプリントが兄貴という事で俺に回ってきてその譲渡なんだけどな。

とは言っても、アリシア姉の好き嫌いにちよくちよくつかいかける人がいないから、ちよつと寂しいだけなんだけどな。

「妹思いですね」

「そんな兄貴って理想的だと思うか？」

「はい」

「そつか。少し安心した。ハルトさんは今日どうするの？」

「家に帰って鍛錬をします。検査も近いですし、その勉強も」

検査、か。医者判断じゃ、今月中には学校に行けるらしいから、心配しなくてもいいって言ってただけど、それでも少し不安だな。それは、俺だからかもしれないかもだけど。だから、蓮華のところに行ってる。

とりあえず、顔だけでも見せていつてほしいというのが本望な訳だけでも。まあ、無理強いもよくない。検査前だし、我慢するか。

「わかった。じゃあね」

「はい。また明日」

俺はハルトさんと別れて、病院に向かって歩き出した。校門を出ると、管理局の人とすれ違う。事件性が今回は異常だったため、調査をしているみたいだ。まあ、それもそうだろうな。

一応の転送ポートは人の目に付かないところにあるし、来たとしても不法侵入で警報が鳴るはず。なぜそれが鳴らずに侵入できたのかという事がかなり気かりだな。俺から見ても、それは確実におかしい点だ。けど、管理局が動く程度の事じゃない。そうは思うんだがな……。

「ま、俺らみたいな一般人が管理局あーだこーだ言ってもわからんか」

俺は足を進める。空は日が傾いて茜色に染まっている。偶には空を見る事も悪くはない。今まで考えてた堅つ苦しい事を一瞬で払えるからな。そんなこと考えてる間に病院の目の前に立っていた。

俺は受付で手続きを済ませて、蓮華の病室へ入る。両腕をギプスで固定されている蓮華のその姿は、何と言つかシユール。腕だけ太い。アンバランスがすごい。

「元気か？」

「そう見える？」

「見えないな」

「だったらわかるでしょ。バーカ」

せつかく来てやったのにバカ呼ばわりって言うのもなんかな。まあ、ここで機嫌を損ねるのも嫌だし。

病室にあった椅子を引っ張って蓮華の顔がよく見える場所に座った。と言っても、離れてるのも寂しそうだったから、かなり位置は近いんだけどな。

「ば、バカ近いー!」

「ぐほあっ!？」

思いつきりギプスのついた強化型のアームで殴られ、俺は椅子から落下して後頭部を撃ちつける。俺は涙目になりながら後頭部を労り、そのついでと言わんばかりに蓮華に文句を飛ばす。

「いきなり何しやがんだ！」

「それはこつちのセリフ！！ いきなり顔近くしないでよ！！」

「なんか不都合でもあるのかよ？」

「それは……」

俺が聞いた言葉で、蓮華は黙り込んでしまふ。もぞもぞして顔も赤いし、熱でも出てきたのか……？ そう思っただけ少し心配になった俺は顔を無理矢理こつちに向けて額同士をくっつける。

「——っ！！」

「んゝ。熱はない様だな」

俺はそう呟いて、額から顔を離すと蓮華の顔は夕陽のせいかわからんけどかなり赤くなっていた。いや、熱はない様だしそれが自然だよな。なんか良く見てみると口をパクパクさせて固まってるし。

熱計ったくらいで何をそんなに挙動不審にしてるんだよ。俯いてわなわなと肩を震わせてるし。少し身の危機を感じる俺は、蓮華から数歩離れ——。

「逃がさん！」

「ぐはっ！！」

られず、右のアームで俺の頭を裏拳よろしく殴った後にベッドから飛び降りて、俺に足蹴りを見舞う。痛くてたまったもんじゃない。

「この！ この！ 変態！ バカ！！ スケベ！！ 死ね！！」

「お前は毎回毎回……!!」

そろそろ俺も限界だったので、蓮華の足を引つ掴んで、俺の顔の横に置いてから立ち上がる。そこまで俺の顔が怖かったのか数歩下がって萎縮する。

自分の妹がガタガタ震えてるのを見ると、少し怒る気も萎えたので蓮華の頭の上に手を乗せる。

「言い過ぎだろ？ 謝ったら許してやる」

「ごめんなさい……」

「はい、よくできましたと」

そう言つて時計を確認すると、もう晩飯の時間が近づいていた。

俺は蓮華を抱っこしてベッドに寝かせてやってから鞆を持って退室した。はあ、早く晩御飯作らないとな……。

「さて、今日の結果を見てだけど。どう思つかな？」

「微妙ですね。正直言つて」

「そう」

とある女と男がミッドのショッピングモールで歩いていた。そこで何を買うという訳でもなく、ただ息抜きに見て回っているという感じではあるが男の方は手をせわしなく動かしている。コンソールとディスプレイを交互に見ては、誤字を修正。書き直し。その繰り返しだ。

「息抜き時間くらい休めばいいのに」

「……」

ピ。ピ。ピ。ピ。……。

「ねえ、里吏君？」

「……」

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。……。

「怒ってる？」

ピ……。と音が一瞬途切れ、里吏と呼ばれた男は良い笑顔で女の方を向いてさわやかに告げる。

「いいえ？ 怒ってませんが。アリスさん」

「ごめんなさい」

アリスと呼ばれた女は反射的に頭を下げた。里吏はアリスの頭に右手を乗せてもう片方の手で自分の手の上から思いっきり拳をぶつける。

「痛い……」

「全く。その態度が部下に全部仕事押し付ける人の態度ですか？ 片腹痛いです」

涙目で頭を押さえているアリスとそれを呆れた様な眼で見ている里吏。わからない人も多いと思うので一応記述しておくがアリスの方が上司である。

それなのにこの違いは階級だけでは表せない何かがあるということであるということ。

「酷いなあ。君には任せてないのに」

「責任転嫁すると、俺の首も切られるんでね。こうなりや俺の道理を貫きますよ」

里吏はそう言うコンソールを弄りながら歩き出す。アリスはその後を追うように小走りし、文句がありげな表情で里吏の方を見る。

「なにも押しつけてなんか……」

そう言われ、里吏は足を止める。後ろを歩いていたアリスは顔面を打ち、数歩下がって里吏の方を見上げた。その瞬間に背筋が凍りつくような感覚に襲われる。

「ほう？ 俺とアンタしか行っていないあの現場の始末書を部隊の部下共100人にやらせる事を押しつけるという言葉以外のどの熟語で表現するつもりで御座いましょうか？」

「それは……」

里吏のかなりの怒り表情にアリスは目を逸らす。正直言って、こういう状況になる事は予想していたのだがやっぱり恐怖には目を向けたくないというのは生き物として正直なところだろう。

「目を逸らすな」

「いや、だって……。部隊の皆さんが手伝ってくれて事だったし……」

「だ、そうだが？」

『それは間違いです。確実にやらされました』

「うみやあああああああ！？」

若干壊れたアリスの声を聞いた人たちが一斉に視線を向けるがそ

れ以上に彼女は里吏が手に持っている通信機を奪い取ろうと奮闘していた。

「らしくないですねえ。アリスさん」

「それを貸して！ 今すぐ！！ じゃないと殺す！！」

「いいですよ。俺が全部始末書片付けますから」

里吏はそう言うと、近くにあったベンチに腰掛けて作業を始めた。アリスは里吏の隣に腰掛け、作業をじーっと見ている。

「う……。知らぬ間に誤字を……」

里吏はそう呟きカーソルを戻して誤字を修正しまた一番最後まで戻って打ちこんでいく。アリスは隣でその作業をしている里吏を見て自分の財布を取り出してどこかへ歩き去る。

彼は五月蠅いのがやっといなくなった。と残りの作業量を確認する。半分どころか3分の一すら切っていなかった。里吏の口からため息が自然と出る。

「それにしても、今回は盛大に暴れてくれたな、アイツ」

里吏はふと思い返したように空を見上げて呟く。そして、さらに考えを発展させる。

格闘の基礎はできてないし、射撃というか砲撃の能力の皆無のアイツが戦えたのは、学校という地形を利用したから。そうは思う。だけれど、プラズマ弾を作れるとまでは考えていなかったというもの。

不意に振り上げた左手には漆黒の羽根の文様が刻まれている。これが、鮮血の暗殺部隊である証、漆黒の呪印。ブラック・マーカ自分がいる理由を考えると簡潔にまとめられるが、考えたくなくなり、参道の方を見る。

「平和だな。俺達と違って……」

妬みの感情の入ったその呟きは誰の耳にも届かずに、虚空に消えていった。と、その時。目の前がいきなり暗くなった。顔を上げるとアリスが立っていた。その手には、勘のウーロン茶が握られていた。

「ほい。これ」

「珍しいものを見ました」

「いらないの？」

「いりますけど」

「じゃあ、さっさと終わらしちゃうか。目指せ、3分以内！」

「はいはい」

里吏は、アリスにデータを譲渡して仕事に取り掛かった。

「まさか外食になるなんてな」

「ホントは蓮華も連れて来たかったんだけどね」

「それ言い始めたら、キリないよ？」

グイータ、ファイ、フェイトなどを含む八神一家はただいま外食に出かけていた。というのも、帰ってきたのが案外遅かったため、ファイには悪意がない。

それに、外食も久しいから行こうという風になったのだが。そこは蓮華がとファイが渋ったのだが。

「まあ、蓮華が帰ってきたらまた行こうよ。もうすぐ連休だから、あの合宿が始まる前にね」

とアリシアのその言葉でファイは渋々了解し今に至る。結局のところ、自分も行きたいという欲望に負けてしまったのが真実ではなかろうか。

「俺は欲望になんか負けてはいない、贅沢は敵、贅沢するくらいなら国のために死ね……」

「いつの時代の戦争生き抜いてきたんだお前は」

とそんな事をシグナムが呟いている間にもファイは歩き続けている。何時の間にか追い越して、先頭を歩いていた。「気をつけてな」
「というはやての声も聞こえず、歩いていた人とぶつかってしまった。そして、尻もちをついた。」

「痛……」

「あらあら。大丈夫う？」

声からして、女性であった。ファイは大事な事を伝えようと頭を上げる。

「大丈夫で——」

「あ」

先に声が出たのは、女性の方だった。ファイは顔を上げ、その女性の顔を見て少し考えた。

「あ」

そう。あの時、恩人とも言うべき女性だった。純白の色の服を着ていたからわからなかったが。確かに包帯なんかを巻いてくれた人だ。

『あああああああああああああああああ！！』

いろんな意味での絶叫が響き渡った。

—— 本当に、いろんな意味が重なった絶叫が。

第二話―鮮血の暗殺部隊（後篇）―（後書き）

さて、ちょっと考えた結果。更新をいったん止めますね。
感想が来るようでしたら、また再開します♪
では♪

PS：

隊長、感想が欲しいです……！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7196r/>

魔法少女リリカルなのは X.story—銀の覇王—

2011年6月24日17時48分発行